

自由南アフリカの声

Voice of Free South Africa

2019年10月

No. 74

～1冊の本が人生を変える～

発行 / アジア・アフリカと共に歩む会

Together with Africa and Asia Association (TAAA)



2019年9月の報告

- 2月～9月 南アにて、図書・学校菜園などの活動を推進
国内にて、英語の本などを収集、分類・梱包作業
- 4月 「有機農業塾を拠点とした農村作り」プロジェクト終了
- 6月 さいたま市にて TAAA 帰国活動報告会
- 9月 「生徒の経済・社会参加に向けた学力向上と基礎技能習得」プロジェクト開始
- 9月 本1万3千冊を南アに送付

目次

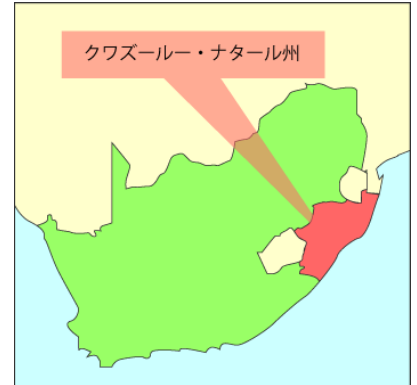
・有機農業塾を拠点とした農村作り(平林薫).....	2
・先生と生徒たちと共に歩んだ6年間(久我祐子).....	6
・2018年度決算書.....	8
・8月の作業(野田千香子).....	9
・TAAAからの英語図書寄贈について(今村嘉宏).....	10
・活動日誌.....	11
・寄付金や本などを下さった方々.....	12



本を受け取り大喜びの少女

～JICA 草の根技術協力事業～ 有機農業塾を拠点とした農村づくり

TAAA 南アフリカ事務所 平林 薫



2010年ワールドカップの年から9年

2010年7月、南アフリカがちょうどワールドカップで盛り上がりつつあった時、ウグ郡における最初の JICA 草の根技術協力事業“学校を拠点とした地域農業促進プロジェクト”を開始した。きっかけはダーバンで活動を行っていた際に州教育省プンガシエ教育センター長のドラミニ氏と出会い、ぜひウグ郡で事業を行って欲しいというリクエストをもらったことだった。同事業ではウグ郡の離れた3地域（プンガシエ・ドゥドゥドゥ・ヒバディーン）を対象とし、それぞれの地域住民グループと学校23校で活動を行った。

“畑仕事は罰則じゃないか”と保護者クレーム

教育支援団体である TAAA が農業のプロジェクトに関わるようになったきっかけは、ダーバンベースの南アの NPO である ELET が JICA に“学校菜園プロジェクト”を提案し、共同でイレンベ郡ソドウェドウェ地域の学校での活動を行ったことだった。80年代のアパルトヘイト政権当時から遠隔地域の学校へのサポートを続けてきた ELET は、“今、地域や学校で何が必要か”を鋭く察知し、事業の提案と活動を行ってきた。学校菜園は、生徒が学校で農業の知識と技能を習得すること、収穫物を学校給食に利用して栄養をとること、余剰分を販売して少しでも学校の収入にすること、等の意義があり、勉強はちょっと苦手でも畑仕事は楽しい、といった生徒も見られるようになった。ソドウェドウェ地域は現在の活動地ウグ郡よりも保守的だったのかもしれないが、“男の子に水汲みをさせるなんて”とか“畑仕事は罰則じゃないか”などと保護者からクレームが入ったことも



あった。それでも“学校での教育の一環”としての農業技術指導と位置付けて活動を行った。その後、ウグ郡に移って TAAA が独立して事業を行うことになったが、TAAA が農業指導のプロジェクトを行うことについては心配もあったと思う。ELET からは事業の管理や進め方などに関して多くを学び、活動を行う上で、いつも ELET との共同プロジェクトでの経験をお手本にしてきた。

南アのベテラン NGO や有機専門家に学ぶ

また、ウグ郡3地域での活動を始めるにあたり、AJF 代表の津山直子さんが農業専門家のリチャード・ヘイグ氏を紹介してくださったことに感謝している。それ以来、活動は“有機農業”となり、農業経験のない私自身も、事業関係者や対象者もヘイグ氏の徹底した“有機農業”の指導に引き込まれ、大きな影響を受けた。今や有機農家や指導員も誕生し、ヘイグ氏は“ムタルメ地域の有機農業の師”と言える。

特色の異なる3地域で実施

3地域での活動ではそれぞれの地域の様子や違いが興味深かった。

- ① 山間部のプンガシエはあまりプロジェクトには慣れていない様子で、校長や先生方の戸惑いが見られ、活動の定着に時間がかかった。当初ファシリテーターが教育センターをベースとして活動していたが、今思うと、彼らも外部から行って慣れない場所での活動は大変だったと思う。
- ② ドゥドゥドゥは郡内でもダーバン寄りでアクセスは悪くないが、地域内の政治的な不安定さを感じることがあり、また、対象校の活動にもばらつきが見られた。
- ③ ヒバディーン（後のムタルメ・トゥートン学区）は私自身が移住して学校訪問がしやすくなったこともあり、学校との関係が深まってきた。事業終了時には対象校が大幅に増加するなど、活動への熱意が見られたことから、次のムタルメ・トゥートン学区での



エナレニ有機農場で研修を行うヘイグ氏

有機学校菜園活動につながった。また、事業で“ヒバディーン地域住民グループ”であった、ムシカジ山のふもとの住民グループとは、後に有機農業塾の事業で再会することになる。

ヒバディーングループの対象校であったムタルメ小では、DJ（クマロ先生）が熱心に生徒に畑作りを指導し、活動も活発であった。農業塾のトレーニングコースにもクマロ先生から畑作りを教わって興味を持った、という若者の参加があった。事業の中で有機農業や栄養に関する絵や作文のコンテストを行ったところ、7年生のゾドワさんがお母さんと畑作りをするストーリーをしっかりと英語で書いてくれた。ゾドワさんは現在、ズールランド大学で理数科教師になるべく勉強しており、昨年ムタルメ小で実習を行った際に農業塾に来てくれて、成長した姿に感激した。

有機“学校菜園”プロジェクト

2013年7月から2016年1月まで、ウグ郡ムタルメ・トゥートン学区の40校を対象とした“有機学校菜園プロジェクト”を行った。地域を4グループに分け（沿岸部・ココココ地域・サトウキビ地域・山間部）、できるだけ近隣の小中高を対象校に入れて生徒が継続した活動ができるようにした。“学校は地域の中心であり、生徒は地域住民である”という意識を持ち、生徒が家族と家庭菜園作りをすることや、将来農業を仕事にする可能性へも期待しながら活動を進めた。



地域住民グループ、若い男性の参加

4グループそれぞれの代表校をベースとした地域住民グループも結成し、特に若い人たちに活動への参加を呼び掛けた。対象校を巡回訪問する指導員の選出に当たっては、先行事業で州環境省職員としてお世話になったシヨングウェさんが農業専門学校の講師となっていたことから、卒業生のシャリ・モコテリさんを紹介してもらった。もう一名は、図書事業の指導員として活動を行っていたカムレラ・グメデさんが、従兄弟のボングムーサさんを紹介してくれた。まだ“畑作りはおばあちゃんの仕事”と考える住民が多い中で、若い男性が農業指導員として学校訪問をしたことは、特に男子生徒にとって活動に携わりやすい環境を作ることができたと思う。



農業に理解・関心の高い山間部に“農業塾”

近年、沿岸部では急激な人口流入があり、学校数も生徒数も多いため利用できるスペースに限界があることや土壌も砂地で良くないなど、活動がなかなか進まない学校が見られた。やはり畑作りには土地も十分にあり、土壌もよい山間部の方が適しており、落ち着いて活動が進められた。全体的にどの地域でも乾期の冬は灌漑用水確保が難しく、近くに枯れない川が流れている地域は活動の発展につながった。また、特に校長や担当教師が農業経験を持っていたり、農業への理解・関心が高かったりする学校は活動が活発に行われた。4つのグループの中で、ココココ地域と山間部の

トフェット地域の学校や地域住民の活動に進展が見られたことが、次の“有機農業塾”の事業につながった。

山間部のトゥルベケ小はドラドラ前校長がファーマーのような人で、自身も畑作りに熱意を持ち、生徒への技術指導の重要性を非常に良く理解していた。校長は自然科学の授業として全校生徒に畑作りに携わらせ、成績に反映されることから、生徒が競争して頑張る姿が見られた。教室での勉強が苦手でも畑作りで良い成績を取れることは生徒にとって励みとなり、自信につながった。ドラドラ前校長は地域にも出向いて家庭菜園促進を行った。



農業塾で大根を収穫するンギディさんと筆者

ンギディさんの快挙

ムタルメ小（後の農業塾）敷地内のグループの活動は、開始当初はとても活発に行われていたが、残念ながら先細りとなってしまった。若者は現金収入が必要だということでは理解できるし、畑作りを続けるためのモチベーションを維持するのは難しかったかもしれない。このグループの救世主となったのがンギディさんだ。これまでにいろいろな仕事に就いたンギディさんは畑作りを仕事にしたかったそうで、素晴らしい活躍を見せてくれた。現在はプロの有機農家として農業塾内で畑作りを継続して行き、収穫物の販売や地域住民への指導も行っている。そしてつい先日、グループのリーダーであった男性と会う機会があったが、細々と畑作りをして収穫物の販売も行っていると言う。また、縫製の仕事も始めたところで、“自分の手で何かに取り組まなければ何も始まらないことに気付いた”と話していた。

有機農業専門家ヘイグ氏の研修会

2014年8月に東京農業大学の稲泉先生が対象校の活動を視察訪問して下さったことは、指導員及び対象校の教師や生徒にとって大きなモチベーションとなった。また、リチャード・ヘイグ氏が経営するエナレニ農場での研修会への参加は、事業対象者にとって大きなインパクトを与え、



有機菜園活動への興味と関心を深めた。シベクルワンドレ小の菜園メンバーは圧倒的に女子生徒が多かったが、ステンベレ君は小さいころからおばあちゃんと家庭菜園作りを行い、畑作りに興味を持ったことで学校菜園活動にも積極的に参加した。現在ルトゥリ高に通っており、将来は有機農家になる、と話している。ステンベレ君も稲泉先生のご訪問時に菜園活動の説明をしたことや、エナレニ農場研修の経験が強く心に残っているようだ。

州環境省との協力関係 SEEP

事業を進める中で、学校での環境保全教育プログラムである州環境省 SEEP (School Environment Education Program) との協力関係ができた。ウグ郡管轄のザマ氏と出会えたことは大きな“収穫”で、次の有機農業塾の事業に向けて話し合いを進めることになった。地域には進学も就職もできずにぶらぶらとしている若者が多く、農業技術の指導で少しでも収穫物の販売や利用ができるようになれば、という思いから“農業塾”設立の計画が始まった。農業塾の設置場所に関して、既存の地域センターや他の事業で建てられて現在は利用されていないセンター、閉鎖された学校等を見に行ったりしたが、適切な場所がなかなか見つからなかった。先行事業のカウンターパート団体の URDO がコロコロ地域ベースであり、メンバーのクマロ先生がムタルメ小の教師ということで、ムタルメ小の敷地内に設置させてもらうことになった。

アパルトヘイトで失われてきた本来の農業

地域の人たちは“農業”といえば近くにあるサトウキビ大農場を思い浮かべ、多くの資機材や資金がなければ始められないと考えている。また前述の通り、家庭菜園はおばあちゃんの仕事と捉えられており、就職できずに家にも畑に出ることのない若者も多い。南アフリカでは歴史的な要因もあり、広大な土地は大企業が管理し、人々は労働力として使われ、“自分で事業を興すなんてとても無理”という意識が植え付けられている。アイデアがあっても

資本の出所がなく、借りる当てもない。他のアフリカ諸国の人たちのように、畑の収穫物や手作り品を村のマーケットで販売したり、自分の得意なことで起業したりという小規模ビジネスがほとんど見られないのが現状である。アパルトヘイトの制度はなくなったが、大多数のアフリカ人の意識の中に植え付けられた“劣等感と自信喪失”は何よりも残酷で、人々の意識改革が必要と言える。

“有機農業塾を拠点とした農村作り”が続く

2016年7月に“有機農業塾を拠点とした農村作り”の事業が始まった。事業提案時に“有機農業トレーニングセンター”などの名称を考えていたところ、当時 JICA 東京センターで担当してくださった橋口さんと服部さんから“農業塾”って感じですね、とぴったりの名称をいただいた。現地では Mthwalume Organic Agricultural Training School の頭文字をとって MOATS と呼ばれることになった。



農業塾で収穫物を販売する

農業が地域の若者に前向きな影響を与えている

農業塾の活動についてはこれまでの会報でもお伝えしてきたが、今年に入ってからは4月の事業完了と今後の活動継続に向けた準備を進めた。まず、トレーニングコース卒業生へのアンケート調査を行い、112名中83名から回答をもらった。“トレーニングコースの受講は前向きな影響を与えたか”の問いへの“質の良い”“栄養価の高い”“お金をかけない”“味がよい”作物栽培ができるようになった、という回答は、受講者の有機農業への認識を示すものである。また、“地元の NPO に指導員として就職できた”“自分の育てた作物について自信を持って話ができるようになった”“地域の人たちが励まされ、地域が開発された”等のコメントもあり、事業が地域の若者に前向きな影響を与え、次のステップに進むためのきっかけとなったと言える。回答者の半数以上が、将来は“有機農家としての自立・収穫物の販売”を目指していると答えていることから、卒業生の将来の活躍と地域の有機農業の定着に期待している。

農業塾の未来を担う人たち

農業塾は州環境省含む地元 NPO に引き継がれる

当初は州環境省管轄の事業に組み込んでもらう計画を立て、JICA 東京センターの服部さんと共にピーターマリツバークの州環境省本部でダイレクターとの協議も行ったが、今年初めにダイレクターの異動があり、残念ながら進展が見られなかった。そこでザマ氏とも話し合いを進めていた代案である NPC(Non Profit Company)登録作業を進め、州環境省ザマさん、指導員のポングムーサさん、農業塾のすぐ近くに住むムコリシさんをメンバーとして再スタートを切った。事業での活動中に苗の販売や収穫物の配送サービス、リソースセンターでのコピーやインターネットのサービスなどで R13000 の貯金ができ、NPC スタート資金とした。現在は主に育苗と販売、リソースセンターでのサービスで収入を得ているが、メンバーは将来に向けて様々な活動案を練っている。最終的には農業技術のみならず、伝統工芸制作・販売や各種技術指導、エコツーリズムなどを目指しており、これからの展開が楽しみである。TAAA の関わりとしては、南ア事務所毎月1回の会議と、TAAA 本部に四半期活動報告をもらうことになっている。ウグ郡での有機農業の活動の中では、つながりの持つ力や大切さを感じることも多かった。これからも地域の人たちとの出会いを大切に、絆を深めて行きたいと思っている。

2010年からのウグ郡での有機農業の事業がどれほど地域の人たちの現在、そして将来への力となったことが計り知れない。それは JICA で担当してくださった多くの方々が TAAA を信じて活動に携わらせてくださったことの賜物である。日本全国の支援者・寄付者の皆さまから継続した力強いサポートやアドバイスをいただけたからこそ、ここに改めて私自身そして地域の人たちからの感謝の気持ちをお伝えしたい。

9月からは外務省の NGO 連携無償資金協力事業で、ウグ郡内の新しい地域であるドウエシユーラ学区での図書事業を開始することとなった。対象校は図書活動が全く初めてであるが、州教育省関係者としっかりとした協力体制を築いてチームワークで活動を進めて行きたいと思っている。



ムタルメ・トゥートン学区での図書支援活動を振り返って

～先生と生徒たちと共に歩んだ6年間～

TAAA 代表 久我 祐子

TAAA は、2013 年からクワズルーナター州ウグ郡ウムズンベ自治区内のムタルメ・トゥートン学区で学校図書支援活動を行ってきましたが、2019 年3月末に同学区での活動は終了し、今年の9月からは、近隣のドゥエシューラ学区に移って学校図書支援を再開することになりました。



イルンゲロ・フンダ小に本が届いた

本が無い状態から図書環境整備へ

ムタルメ・トゥートンでの6年間、小学校から高校の合計40校の先生と生徒と力を合わせて、教科書以外に本がない状態から図書環境を整えて生徒たちの読書習慣を育てられました。2016年3月～2018年2月の2年間は、外務省の日本NGO連携無償資金協力事業(N連)として、図書環境や図書活動の充実化をはかるだけでなく、図書室に一台のパソコンを設置し、図書委員会生徒たちにパソコン基礎操作を教えました。今では、パソコンは図書委員会活動には欠かせない道具となり、貸し出し記録や図書推進ポスター作りに使っています。また、図書委員会生徒が他の生徒にパソコン操作を教えることも、彼らの図書活動の一部になりました。

TAAA が去った後は、活動を進めていくなかで関係を深めていった ELITS (州教育省図書情報部門) の地域担当者ンデベレ氏が元対象校への支援活動を引き継ぎ、図書を配布して蔵書を増やしたり、司書教師へのアドバイス等を行ったりしています。

自分たちで運営する図書委員会を設立

同学区での6年間、振り返ると様々なエピソードとともに、学校とTAAA双方の成長や気づきがありました。

図書室を作り図書環境を整えるハード面の充実は欠かせませんが、図書委員会を設立し、学校側で図書室を運営できるような人を育てることがいかに大切かを実感しました。この2つが両輪となって学校図書を推し進めていくのです。私は今までに、海外や企業からの寄付で作られた立派な図書室という箱はあるものの、本も運営する人もいないので全く使われていない残念な学校を2、3校見てきました。生徒たちは在学中に一度も図書室を使うことなく卒業していくのです。相手の管理・運営キャパシティを考慮しない中途半端な支援は、かえって悪影響を与えるのだと思いました。

TAAA は、図書室を作る段階で司書教師と生徒たちに関わってもらいました。空いている部屋がある学校にはその一室を使って図書室を設置しましたが、そのような部屋はだいたい物置か巨大なゴミ箱化した「開かずの間」になっているので、掃除の段階で大変です。しかし、画期的なビフォーアフターのプロセスを経て作った「自分たちの図書室！」という学校側の達成感は、その後の活動を支える礎になりました。

発展の力は司書教師研修

司書教師研修にも力を入れました。活動の発展の鍵を握るのが司書教師だからです。司書教師といっても、司書の経験のない先生(大体が英語の先生)が校長に任命されて、図書運営を任せられます。先生たちも自分たちが学び育った環境には学校図書室がなかったので、図書室が学校にあることの意義を最初からは十分に理解していません。そこで、運営や管理の知識も必要ですが、学校図書の意義を伝えて、モチベーションを高めてもらうことが大切でした。研修会を受けた後、実際に図書運営をしていく中で学校図書室の有用性を感じ取り、大きくブレイクする司書教師も出てきました。その筆頭がカンヤ高校のンバンボ先生です。事業当初は倉庫と図書室の区別が分からず、本棚に不要となった古い教科書を並べていたンバンボ先生ですが、図書室の役割とそれがいかに生徒のためになるかを理解し納得した後はスイッチが入り、使いやすいステキな図書室を作り、対象校で1、2を争う実力派の司書教師になりました。その後、先生は猛勉強されて正式な司書の資格も取得されました。ンバンボ先生には、ドゥエシューラ学区での司書教師研修会に講師としてお招きし、今までの経験を語ってもらう予定です。最初はなかなか図書活動が進まず心配していたのが、突然、活発に活動を始める学校はカンヤ高校以外にもいくつかありました。具体的な活動の進捗は目に見

えますが、人の内面のモチベーションの高まりは目に見えません。活動が停滞しているように見えても、相手の内面では色々な刺激を受けながらモチベーションが徐々に高まっている場合もあります。相手に働きかけながら、信じて待つことの大切さも学んだ6年間でした。



ムナフ小で詩の朗読

図書委員会の生徒の働き

なかには最後までモチベーションが上がらない司書教師もいましたが、そのような学校には、校長や図書委員会生徒たちに積極的に働きかけるなど工夫して、出来ることはしていきました。

図書委員会生徒たちの動きにも目を見張るものがありました。彼らにも基礎的な図書室の運営・管理方法を指導し、司書教師の監督下、貸し出しや本の整理整頓など一通りの図書活動をしてもらいました。全校生徒たちに読書と図書室利用を進める図書推進活動や年に数回の図書イベントも、図書委員会生徒に積極的に関わらせましたが、その結果、面白いことがおこりました。

生徒たちの自由な発想で

もともと読書文化のない地域で、本を読む習慣を育てていくことは学校の中でも時間のかかる作業です。しかし、生徒たちに主体的に関わらせることで、図書活動のなかに、歌や踊り、寸劇といった生徒たちに馴染みのある地元の文化が自然と入ってきたのです。音読会を開催すれば、本をただ棒読みするのではなく、ダイナミックなリズムやジェスチャーをまじえたオペラ歌手のように本を読み上げます。台詞の多い本は、役を割り当ててグループで暗記して劇にして一冊の内容を覚えさせた学校もありました。こうして本を敬遠していた生徒も、読書に親しむようになってきました。私も何回か図書活動発表会を観させていただきましたが、ここはオペラ劇場かと錯覚に陥るほど生徒たちの力強い声とジェスチャーに魅了されました。低学年生に感想文を書かせれば、最初はカラフルな絵のなかに文字はほんの少し。しかし、彼らの絵や色使いから豊かな感受性が伝わりました。学年が上がるごとに段々文字が増え、文章で感想を伝えるようになっていきました。魂で感じたものを歌、絵、劇でストレートに表現する彼らの文化を自然な

形で学校図書活動に取り入れながら進んでいった感があります。一方で黙々と本を読む読書好きも大勢育ち、静と動が入り交じった感じで図書活動が展開されていきました。このような地元の文化を反映した図書活動は、TAAA 主導では出来なかったことで、司書教師、生徒たち、TAAA が協力し合い、お互いのアイデアをリスペクトし合ってきたからできたことだと思っています。日本の学校のかっちりとした委員会制度と地元の豊かな表現力が結びついて、図書活動が根付いていきました。

南アフリカを含めたアフリカ諸国では、今でも都市部以外は図書室がない学校がほとんどです。今後、アフリカの地方の学校に学校図書を導入していくにあたって、ムタルメ・トゥートンの地元文化を反映した学校図書活動の発展は、一つの参考事例になるのでは、と考えています。

図書室の整わないドウエシューラ学区で継続

ムタルメ・トゥートンの司書教師とは今でも連絡を取っています。「図書室で地域住民対象の成人識字教育も始めた」「コンテナ図書室が手狭になってきたので、空いている教室を使って自分たちで図書室を設置した」などの新しい動きを伝える、嬉しい情報が入ってきています。

9月からは、近隣のドウエシューラ学区で外務省 NGO 連携無償資金協力事業として、12校を対象に2年間の学校図書支援活動を始めます。ほとんどの学校には図書室がなく、本といえば教科書しかない環境で、また一からのスタートとなりますが、ムタルメ・トゥートンでの経験を生かし、2年後には図書活動が根付き持続発展していける状態を目指して、教師と生徒と一緒に楽しみながら活動をしていきたいと思っています。引き続き、ご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。



生徒たちの力で使いやすい図書室になりました。

2018年度(平成30年度)活動報告書 (2018年4月1日から2019年3月31日まで)

科 目	金 額	単位：円
I 経常収益		
1 受取会費		
正会員受取会費	135,000	
賛助会員受取会費	0	135,000
2 受取寄附金		
受取寄附金	1,201,065	1,201,065
3 受取助成金等		
受取公共助成金	15,598,000	
受取民間助成金	0	15,598,000
4 その他収益		
受取利息	31	
雑収入	0	31
経常収益計 (A)		16,934,096
II 経常費用		
1 事業費		
(1)人件費		
給料手当	7,935,701	
臨時雇賃金	259,903	
法定福利費	0	
人件費計	8,195,604	
(2)その他経費		
プロジェクト物資購入費	843,026	
研修費	67,367	
制作費	0	
プロジェクト物資輸送運搬諸経費	78,934	
旅費交通費	564,717	
車両諸経費	2,557,954	
車両 燃料費	1,027,341	
視察訪問費	1,064,363	
専門家派遣費	0	
施設使用料	0	
会議費	41,562	
通信・運搬費	239,500	
印刷・製本費	59,151	
消耗品費	27,033	
水道光熱費	32,782	
地代家賃	347,567	
支払手数料	29,741	
保険料	67,040	
雑費	26,844	
その他経費計	7,074,922	
事業費計		15,270,526
2 管理費		
(1)人件費		
臨時雇賃・講師代	0	
役員報酬	0	
人件費計	0	

(2)その他経費			
会議費	0		
旅費交通費	3,106		
車両諸経費	74,486		
燃料費	0		
通信運搬費	19,915		
印刷製本費	2,563		
消耗品費	4,843		
水道光熱費	0		
支払手数料	112,450		
地代家賃	0		
事務所設備・修繕費	36,688		
業務委託費	120,000		
租税公課	50,400		
雑費	11,276		
前年度助成金返還金	162,303		
その他経費計	598,030		
管理費計		598,030	
経常費用計 (B)			15,868,556
当期経常増減額 (A - B)			1,065,540
Ⅲ 経常外収益			
1 固定資産売却益		0	
経常外収益計 (C)			0
Ⅳ 経常外費用			
1 過年度損益修正損		0	
2 為替差損		0	
経常外費用計 (D)			0
①当期正味財産増減額 (A-B+C-D)			1,065,540
②前期繰越正味財産額			4,579,210
次期繰越正味財産額 (①+②)			5,644,750

8月の作業 本の梱包とズールー語訳ラベル貼り

猛暑にもめげず、11人のボランティアがさいたま市の作業場に集まりました。毎月第3日曜日の10時から12時までがTAAAの作業の日です。

前半と後半、二手に分かれて、絵本「ぐりとぐら」にズールー語訳のラベルを貼る仕事と英語の本やサッカーボールを梱包する仕事を交代で行ないました。梱包作業はエアコンのない作業場で行ないます。きょうは、SMBCグループから、4人のボランティアのかたが見えました。Aさんと小学生のお嬢さんは昨年の8月にも参加されたリピーターのかたでした。Bさんは最初、SMBCグループから来られて、今では、毎月、参加してくださっています。20kgを超えるような梱包された段ボールの重さを測り、高く積み上げるなどの力仕事を引き受けてくださる頼もしい存在です。



(野田千香子)

あしながウガンダレインボーハウス

TAAA からの英語図書寄贈について

あしながウガンダ現地代表 今村嘉宏

あしながウガンダレインボーハウスは、2003 年に、ウガンダの首都カンパラ郊外にあるナンサナ地域に開設されました。当時、ウガンダは世界に広く拡大した HIV/AIDS の影響を最も大きく受け、それが原因の 1 つともなり、多くの遺児を発生させました。

あしながウガンダレインボーハウスは、HIV/AIDS で親を亡くした子どもたちに対する心のケアを行う施設として開設され、その後、2008 年には、経済的理由から小学校にも通えなくなった子どもたちに対する教育事業（Terakoya）を開始しました。現在は、理由を問わず、親を亡くした子ども達を対象としています。ウガンダでは、初等教育の授業料は無償ですが、学用品や給食代などの経費は各家庭負担です。したがって、親を亡くした子どもたちの中には経済的理由から就学できなくなる子が少なくありません。そうした子どもたちに公教育と同じ教育機会を提供し、修了後は、若干の奨学金とともに公教育に戻ってもらうことを目的として、Terakoya 事業を実施、現在は、日本でいうところの年長クラスから 3 年生までの 69 名が勉強しています。

ウガンダでは、英語が公用語の 1 つとして定められていますが、家庭での言語は現地語であることが通常で、子どもたちは学校で始めて体系的に英語を習うこととなります。そのために英語の授業及び読書（Reading）クラスを設けていますが、教科書も 1 人 1 冊とはいかず、コピーで対応している他、副読本も圧倒的に不足しています。町中の本屋さんにも子ども向け図書はありますが、学習用に適した本となると種類も数も多くありません。

そこで、今回、会議での帰国時に、旧知の TAAA 元代表である野田さんに、ご寄付の可能性をお伺いしたところ、代表の久我さんにもお話いただき、ご快諾をいただきました。

7 月初めに持ち帰り、子どもたちに紹介、手渡したところ、大変な喜びようでした。授業での利用はもとより、読書という新しい習慣をつけてもらうべく、今後有効に活用していきたいと考えています。

改めて、皆様にお礼申し上げます。



主な活動（2019年2月16日～2019年8月15日）

高宮 高野

【日本国内】 TAAA 会員とボランティア

2月～8月 本などの受け取りと作業場への搬入 北爪健一
 3月～6月 広報 報告会の準備 丸岡晶
 2月中旬～下旬 住所ラベル変更・出力 西村裕子
 2/17 梱包作業 高野千恵美 久我祐子 浅見克則
 野田千香子 木村志義 高宮康次 塚野悠希 大友深雪
 大橋温子
 2月～8月 ホームページ更新 久我 渡恵美子
 2月～4月 会報73号編集・校正 野田 西村 久我
 3月 会報 会報発送作業 高野 野田
 3/17 梱包作業 野田 高宮 大友 浅見 小泉信一郎 久我
 西村 大橋
 3月下旬～4月上旬 2018年度事業報告書・事業計算書、2019
 年度事業計画書、事業予算書作成 久我
 4月上旬 JICA 草の根事業 第4四半期経理書類提出、業務達
 成報告書（事業終了時）、終了時評価表を加筆修正、
 提出 久我
 4/1 N連説明会参加 久我 野田
 4/11 JICA 事業終了と現地引き継ぎにおける現地への覚書と
 説明文作成 久我
 4/14 JICA 終了時評価表 作成・提出 久我
 4月～6月 N連申請書作成・修正 久我
 4/15 減免申請書類を埼玉県税務署に提出 久我
 4/21 TAAA 理事会
 4/21 本の種分け作業 大友 久我
 5/7 イコールパートナーシップ振り返りシート
 JICAへ提出 久我
 5/19 梱包作業 浅見 高宮 高野 野田
 5/26 本の種分け作業 大友 久我
 5/31 プロジェクトマネージャーと会議 平林薫 久我
 6/11 埼玉県国際協力情報交換会に関するミーティング
 埼玉 NGO 加藤さん、JICA 埼玉 土屋さん 久我
 6/11 JICA 事業完了報告会 平林が発表 久我 野田
 6/15 TAAA 講演会 さいたま市コミセンにて 講師 平林
 6/16 梱包作業 平林 野田 浅見 西村 大友 大橋 小泉
 6/16 TAAA 総会
 6/19 本の種分け作業 大友 久我 野田
 今村嘉宏さんがウガンダへ寄贈の本を取りに来られる
 6/19 セントマリーインターナショナルスクールから
 本引き取り 浅見
 6/20 さいたま市へ、2018 年度事業報告書および事業計算書
 を提出 久我
 6/26 ミーティング 平林 久我
 7/1 外務省 N連申請書 提出 久我
 7/2 マーシャル諸島デラップ小に送った本到着
 7/3 JICA 月刊誌 MUNDI の編集者とミーティング 平林 久我
 7/3 クリスチャンアカデミーインターナショナルスクール
 から本引き取り 浅見
 7/4 大宮アルディージャ訪問 久我 野田
 7/11 埼玉県国際協力情報交換会 事例発表 久我 野田
 7/21 本の引き取り 浅見
 7/21 梱包作業 西村 久我 大友 大橋 浅見 野田

7/24 N連案件選定会議用資料作成 久我
 7/31 外務省 N連案件選定会議 出席 申請事業の説明 久我
 8/5 MOATS 四半期報告へのフィードバック提出 久我

【南アフリカ共和国】 平林薫と南アフリカのスタッフ

2/19 農業塾でスタッフ会議・ムタルメ小にて算数セット指導
 2/20 農業塾トレーニングコース卒業生同窓会準備
 2/21 農業塾トレーニングコース卒業生同窓会開催
 2/22 ELITS ンベレ氏とウムズンベ自治区公共図書館設立準備
 会議出席
 2/26 ジョハネスバーグにてJICA主催のSHEPマーケティング研
 修会出席（平林・ボングムーサ指導員・州環境省ザマ氏）
 2/28 スタッフ全員で州環境省主催 SEEP イベント出席
 3/31 農業塾でスタッフ会議
 3/4 農業塾でスタッフ会議
 3/5 農業塾にてファーマーズマーケット開催
 3/7 州環境省ザマ氏と会議
 3/8 農業塾でスタッフ会議
 3/11～13 オフィスにて事務処理・農業塾 NPC 登録完了
 3/14 ムシカジ小にて保護者対象有機農業研修会開催
 3/15 農業塾でスタッフ会議
 3/18 農業塾でスタッフ会議
 3/19 農業塾にて SHEP マーケティング研修会開催（スタッフ・
 カウンターパート・トレーニングコース卒業生・地域住民出席）
 3/20～24 農業塾がウムズンベ自治区イベントに出展
 3/25 農業塾でスタッフ会議
 3/26～28 物品購入・オフィスにて事務処理等
 3/29 農業塾でスタッフ会議
 4/2 農業塾でスタッフ会議
 4/5 農業塾でスタッフ会議
 4/12 JICA 事業終了・スタッフ送別会
 4/13 ダーバンにて日本大使館主催の懇親会出席
 4/15～19 JICA 完了報告書作成と提出
 4/24 州環境省ザマ氏と会議
 4/26 農業塾 NPC メンバーと月例会議
 4/30 農業塾訪問、今後の活動について話し合い
 5月前半 JICA 事業完了報告会資料作成・レベル別本の整理等
 5/13 州教育省ドゥエシユーラ学区長ザミサさんと会議
 5/23 農業塾 NPC メンバーと月例会議
 5/26 日本に一時帰国
 7/6 南アに戻る
 7/11 農業塾 NPC メンバーと月例会議
 7/17～20 JICA 月刊誌 MUNDI の農業塾取材チームに同行
 7/27 イルンゲロ・フンダ（地域女性の読書推進活動）訪問と本
 の寄贈
 8月前半 新規図書事業対象校レベル別寄贈用本の整理
 8/13 州教育省ドゥエシユーラ学区長ザミサさんと会議